れは、彼のすさまじい「ネバーギブアップ」の表現であった。

その大越クンが、とうとう早大野球部をやめてしまった。甲子園準優勝投手の実績で今年、早大人間科学部に推薦入学。1年生ながら「東京六大学」春のリーグ戦で3勝し、優勝の立て役者になるなど、野球人生を謳歌していたハズの彼が11月16日、退部届けを提出したのである。東京・練馬区の大越クンのアパートをたずね、退部の真相を聞いてみた(写真右)。

「ひとことでいうと、肌に合わなかったんです。入学前に練習を見学したんですが、その時すでに違和感があった。中学の時、仙台育英の練習を見に行った時は、先輩、後輩の区別なく全員が張り切って練習していた。それに比べると部のムードが暗いというか、ジメジメしているというか……。入部して1日目にもう、ボクとは合わないと感じ、6月の早慶戦終了後にやめようと決心しました」

左の写真はその早慶戦3戦目で投げる大越クンである。これが彼の最後のマウンド姿となってしまった。

確かに関係者にいわせると「精神野球を標榜する早稲田には、武道にも似た、独特の厳しさ、重苦しいムードがある」とか。もっとも、早大のエースとして昭和20年代に活躍した末吉俊信氏によれば「厳しいといっても昔よりはるかに楽になった。私なんか練習量が少なすぎると思ったほど」だそうだ。「鬼」とも呼ばれる石井連蔵監督も大越には気を遣っていた。

「彼は、空気中のチリを吸いこむと、すぐ風邪を引く体質らしい。医者がそういうだから無理はさせなかった」(石井監督)

さて気になるのは大越クンの今後だが、一部には年内に退学、社会人野球入りという噂道もされている。

「デタラメですよ。大学をやめる気はありません。2年になったら最新のトレーニング学や野球医学を勉強したい。ボク自身、肩をこわしていますから」

自分で退部を決断し、「先輩たちには何の挨拶もせずに帰った」というだけに、野球には全く未練がなさそう。甲子園時代のライバルで友人の元木大介クンについて聞いてみると、「もし、好きな球団に入れたら応援に行くから招待券を送ってほしいなア」とアッケラカンとした様子なのだ。一時はプロ野球関係者も関心を示したが、「大学に残るなら、野球は捨てたということだね。我々も、もう見ませんよ」(オリックス・木庭教スカウト)。

投手なのに1番を打ち、塁に出ると走りまくった高校時代の大越クンには型破りの魅力があった。もし伝統と形式を重んじる早稲田を選ばなかったならば、と惜しむのは、買いかぶりすぎだろうか。

Weekly HOROSCOPE 11/22～11/29 あなたの今週の運勢は？ ♥は上昇運 ♥は下降運です

占い 竹村亞希子＋魔女クラブ